

Н. Н. Прокопович :
*Словосочетание в
 современном русском
 литературном языке* (1)

直野 敦

ロシア・ソヴェト言語学の特徴の一つは、言語における二つの基本的単位『語』と『文』の中間的単位といえる w. g. (シンタグマ) の研究にたえず大きな比重が置かれてきたことである。ソヴェト・アカデミー版の『ロシア語文法』(1952-54)においても、措辞論の巻は、大きく w. g. の項と『文』の項にわかれており、w. g. の各タイプが詳細に叙述されている。

本書は、ソヴェトにおけるロシア語研究のこの側面を代表する研究の一つであり、形容詞 w. g. の詳細な記述を目的としている。

本書の著者 Н. Н. Прокопович は、アカデミー版『ロシア語文法』の措辞論中 w. g. に関する項の執筆者の一人であり、今日のソヴェト言語学を代表する一人である В. В. Виноградов の門下に属するものと考えられる。

以下本書の概略を述べることにする。

本書は、序説、第一部、第二部から構成され、巻末に、文例を引用した作品のリストと参考文献のリストがあげられている。

序説の第一章は、w. g. に関する研究の歴史的概観にあてられている。もちろん、ロシアの言語学者の研究史が中心となっている。

まず、М. В. Ломоносов, А. А. Барсов, А. Х. Востоков, Н. И. Греч, Ф. И. Буслев, А. А. Погребня, А. Б. Добнаш, Ф. Ф. Фортунатов ら 18-19 世紀のロシアの言語学者の w. g. に関する理論の要約とその批

判を行なった後、20 世紀に入ってからの諸理論、とくにドイツの言語学者 John Ries の措辞論を詳細に述べ、つづいて、ふたたびロシアの学者たち、М. Н. Петерсон, А. М. Пешковский, А. А. Шахматов らの説を考察している。つづいて構造言語学の立場に立つ言語学者 F. Saussure, Ch. Bally, N. S. Trubetzkoy, H. Frei, F. Mikus, S. I. Karcevski らにおける syntagme 概念にふれ、最後に、Л. В. Щерба, И. И. Мещанинов, Л. В. Матвеева-Исаева ら現代のソヴェト言語学者における w. g. の理論を考察した後に、著者がその理論的出发点としているヴィノグラードフの『ロシア語』(1947)、アカデミー版『ロシア語文法』の理論を要約している。

ここで問題になるのは、構造言語学のその後の発展、とくに Bloomfield 以後のアメリカ言語学において w. g. が一つの重要な研究対象になっているにもかかわらず、著者がそのことについてなんら触れていないことである。とくにアメリカ言語学の重要な概念の一つである immediate constituents (直接構成要素) の理論を完全に無視しているのはなぜであろうか。最近の言語理論である N. Chomsky の generative grammar については簡単ではあるがふれているのであるから、その以前の段階である「直接構成要素」の理論にはとうぜん触れるべきであったろうと思われる。

序説の第二章は、措辞論の枠内における w. g. の位置づけの問題にあてられており、とくに二つの問題が考察されている。一つは w. g. と『文』との関係であり、もう一つの問題は、いわゆる等位(並列)結合の関係にある語群を w. g. にふくめるかどうかという問題である。リースをはじめとして、多くの学者は、第一の問題において、文もまた w. g. の一つの形態にすぎないと考えているが、

著者はこれに対して、現代ソヴェト言語学における重要な概念の一つである предикативность (述語性) にもとづいて、w.g. と文が次元の異なる二つの単位であることを主張している。

ロシア語で Холодно (寒い) という無人称文は、一つの完結した「現実についての叙述」であり述語性をそなえた「文」であるが、w.g. はかならず二つ以上の語からなるものであり、また、述語性をそなえている必要はない。複雑な w.g. たとえば「組合活動に積極的な県教組の執行委員」といういくつかの語からなる w.g. は、あくまで名詞 w.g. であって、文ではない。著者のこの主張はヴィノグラードフの理論を基礎としている。文と w.g. を峻別するこの立場は、正しいと思われるが、ただし、これとは別の次元で、w.g. と文の関係が問題になるであろう。すなわち、ある語が従属文によって規定される場合、この head-word (主要語) と従属文をふくむ全体を一つの w.g. と考える可能性もあるからである。「17 年のあいだ低学年ばかりを担当して来た女教師」という語群は、明らかに一つの文ではない。これを w.g. の一つのタイプと考えることができるのではないか。直接構成要素の理論によれば、「女教師」とその前の従属文は、主要語と従属語との関係に等しく、従属文を「美しい」という形容詞によって置きかえても、この w.g. のタイプは本質的には変わらない。この問題を著者は本書の第一部第二章で論じている。そして著者は従属文が、文であるかぎりそなえている述語性——それには、時称、法、などの本来の w.g. にふくまれない概念がふくまれている——のゆえに、w.g. のカテゴリーには入れるべきではないとしている。すなわち、文の次元において扱うべきものと考えている。しかし、この点ではまだより精密な理論化が要求されるであろうと思われる。

第二の等位(並列)結合の問題については、w.g. を主要語と従属語との「二元性」の従属関係において成立するものとする著者は、二語または数語の等位関係における連結を w.g. のカテゴリーにふくめない、という立場をとっている。著者によれば、従属的な語結合は閉鎖的であるのに対して、等位的語結合は開放的であり、後者は、文中においてのみ成立すると考えている。しかし、はたしてそうであろうか？ この点については、後に触れることにする。以上が序説の部分である。

本論の第一部は「w.g. 理論の諸問題」と題され、次の三章からなっている。

第一章「w.g. と語」においては、w.g. が機能的には、w.g. 中の主要語に等しいものであり、ある場合には、意味の上からも一語に近いものになるという事実が指摘されている。たとえば、широкий в плечах と широкоплечий (肩幅の広い) の前者は形容詞 w.g. であり、後者は形容詞である。第一章ではまた、w.g. と造語法との関連についてもべられている。しかし、著者がより詳しく論じているのは「w.g. の範囲」の問題である。著者は、w.g. が、基本的には二元的性格の構造——主要語 + 従属語——を持つということを目指した上で、従属語がさらに他の語との関係において主要語としての役割を果たし、または、第一次の w.g. が主要グループとして別の従属語に規定されるといった形で、w.g. の構造が複雑になり、多元化することを考察している。その様々のタイプが列挙されているが、多元的構成の w.g. を図式化すれば次のようになるであろう。

主要語を A とし、この主要語に対する従属語を c とし、さらに c に対する従属語を y とし、(A ← c) の w.g. に対する従属語を m とする (← は従属関係を示す)。

基本的な w.g. の形は、русский язык (ロシア語)、выгодные условия (有利な諸条

件)のように、普通ロシア語の形十名の w.g. では、 $c \rightarrow A$ の形になる。これが多元化した場合の基本的な形は、 $m \rightarrow (c \rightarrow A)$, ($y \rightarrow c$) $\rightarrow A$ となる。

〔例〕 **современный русский язык** (現代ロシア語)
экономически выгодные условия
 (経済的に有利な諸条件)

時には、 m と c のどちらが第一次の w.g. に属するのかわからない場合が生じてくる(本書 67 ページ)。

покосившаяся хатенька около школы
 c A m
 (学校の傍の傾いた小屋) という w.g. は、 $(c \rightarrow A) \leftarrow m$ の形式と考えることもできるが、同時に、 $c \rightarrow (A \leftarrow m)$ の形式と考えることもできる。

これは、直接構成要素の理論においても生じる困難であって、今後に解決されるべき問題の一つである。

しかし、以上のように重層的な構成の w.g. を認めるとすれば、等位結合の w.g. も当然認めるべきではないかという疑問が生じる。上の図式において、 A, c と等位的関係において結合する語をそれぞれ B, d とすれば、次のような構成が考えられる(+ は等位結合の関係を示す)。

$(A + B) \leftarrow c$

$A \leftarrow (c + d)$

вздохи и зеванье старухи (老婆の溜息とあくび)

связь теории и практики (理論と実践の結びつき)

このような場合の $A + B$, $c + d$ の w.g. を研究対象から除外することはたして妥当であろうか? 少なくとも、w.g. の範囲を問題にする時は考慮に入れるべきであろう。

第一部第二章は、w.g. と文の関連を論じ

たもので、ある w.g. の成立が、その w.g. の文中における機能によって限定されるか否か、という問題がとりあげられている。

たとえば **новый дом** (新しい家) という w.g. は、文の主語、述語、動詞の直接目的語、その他文中または多元的 w.g. 中において任意の機能を果たすことができる。これに対して、Я ему больше не слуга。(私はもう彼の召使ではない) という文章において、代名詞の与格 ему と名詞の主格 слуга を一次的 w.g. とする w.g. は、このような nominal predicate (体言述語) の機能においてしか成立しえない。この指摘は重要である。

第二章では、このほかに、前に述べた従属文と w.g. の関係の問題も扱われ、さらに w.g. が、文中においてうける機能的変化の問題もとりあげられている。名詞に従属する形容詞または形容詞 w.g. が、述語動詞に対して副次的な従属関係を持つことによって、機能的変化を蒙る過程が考察されている。

Сконфуженный секретарь удалился.
 (狼狽した書記は退散した)

Сконфуженный, секретарь удалился.
 (狼狽して、書記は退散した)

この二つの文章のうち、前者においては、「狼狽した書記」は明らかに名詞 w.g. であるが、後者においては、この w.g. が分解して、「狼狽して」は、主語および述語の両方に対し、あるいは文章全体に対し規定語としての役割を果たしている。

第一部第三章は、w.g. の形態論であり、品詞と w.g. との関係が論じられ、w.g. の結合のタイプが考察されている。従来、ロシア語文法学者の間では、w.g. の結合関係のタイプとして **согласование** (呼応), **управление** (支配), **примыкание** (付加) の三つを区別する伝統があった。この区別の方法、

とくに支配と付加の両タイプの区別がきわめて漠然としていることはすでにヴィノグラードフが指摘しているが、本書の著者も同じ立場に立ち、以上の区別よりもむしろ「必然的」および「随意的」語拡充 (распространение слов) という二つのカテゴリーにわけけることを主張している。

たとえば зеленая зона (緑地帯), нарушитель порядка (秩序の破壊者) などの名詞 w.g., читать книгу (本を読む), участвовать в собрании (集会に参加する) などの動詞 w.g. その他は「必然的語拡充」のタイプであり, уехать в Крым (クリミアへ去る), мокрые камни (濡れた石) などは「随意的語拡充」のタイプである。ロシア語文法学者の中には、「支配」のカテゴリーの中に強支配と弱支配の区別を立てる者もあるが、その境界が相対的なものであることは、著者の指摘する通りである。

以上が、w.g. に関する理論的諸問題を扱った第一部の内容である。

第二部は、現代標準ロシア語における形容詞 w.g. の具体的な研究である。第一章は、形容詞 w.g. の形成における長語尾形と短語尾形の相互関係、第二章は前置詞をともなわない名詞との w.g., 第三章は前置詞をともなう名詞との w.g., 第四章は従属副詞との w.g., 第五章は不定詞との w.g. となっている。これらの問題についてここで論じることは、紙数の関係で不可能であるが、全体を通じてのいくつかの問題点を列記することによって結論とする。

(1) 語順の問題。本書の欠点として言えることの一つは、語順の問題が完全に無視されていることである。すなわち、形→名の w.g. において、ロシア語の通常の語順が, bounded form⁽²⁾ においては、形→名の順であり、また副→形の w.g. においても、副→形の順となることが指摘されるべきで

あろう。また、不定詞→形の w.g. においては、通常の語順が、形←不定詞の形であり、この w.g. がさらに他の名詞に従属する場合は、通常名詞に後置されるといったロシア語の特徴が明確にされるべきであったと思われる。

(2) syntactic synonym の問題。本書の長所の一つは、いわゆる syntactic synonym についての詳細な考察が一貫してなされていることで、たとえば、形+与格からなる w.g. は多くの場合、形+(для+名詞〔代名詞〕の生格)の w.g. とほとんど同義において用いられる、といった指摘は貴重である。

(3) w.g. の限定性の問題。本書で扱われた形容詞 w.g. について考えてみても、名詞〔代名詞〕の生格を従属語とする形容詞 (полный, достойный など) や、不定詞を従属語とする形容詞 (готовый, способный, склонный など) は、数の上で限定されており、したがって、これらの形容詞の網羅的なリストをあげることは可能である。ロシア語の記述文法においては、今後このような面での研究も必要であろう。

(4) 前置詞 w.g. の問題。本書においても、アカデミー版『ロシア語文法』においても、前置詞 w.g. は、名詞 w.g. の一タイプとして扱われている。これは、ロシア語においては、名詞・代名詞の格変化形と、前置詞+名・代の格変化形が、主要語に対して同一の被支配の関係に立ち、その際前置詞のあるもの (на, в など) は、文法的機能を果たすことにその主要な役割があるといった状況によるものと考えられる。また、一般に w.g. が endocentric construction (内心構造) であるのに対し、前置詞 w.g. が exocentric construction (外心構造) であるといった点にも由来しているものと思われる。しかし、前置詞+名詞 (代名詞) の二語から

なる前置詞 w. g. を一語の名詞のカテゴリーに埋没させることは誤りであると言わねばならないのではないか。

以上のような問題点は今後のロシア語研究において新しい解決を見られると思われる。いずれにしても、本書は、w. g. の研究における貴重な貢献であることは疑いをいれない。

注

1. ロシヤ・ソヴェト言語学における用語のうち、まだ日本語の定訳がないものについては、英語を用いた場合もある。словосочетаниеというロシア語は『句』と訳すこともできるが、日本語における『句』の意味が統一されていないので、暫定的に word-group (語群) をとることにした。以下 w. g. と省略する。синтаксис は『措辞論』とした。
2. ここで言う bounded form は、E. A. Nida が A Synopsis of English Syntax において用いたと同じ意味において用いられる。

Н. Н. Прокопович: *Словосочетание в современном русском литературном языке*, Издательство “Просвещение”, Москва, 1966